

女子美

No.152/2005



絵:石川 英太 「大きな木」(タペストリー)

2P 00インタビュー—佐藤敬子さん・肇さん夫妻—
6P 高橋 秀氏インタビュー
8P 三谷青子客員教授「旭日小綴章」を受章 他
9P 女子美ウェブサイトリニューアル 他
10P 女子美にキティちゃんがやってきた! 他
11P シリーズ卒業生の美術館① 他
12P パリ5年目の夢。—野口香子(画家)—
13P 就職だより
14P 女子美アートミュージアム展覧会情報 他
15P シリーズ歴史資料紹介⑩
16P 安斎重男氏 特別講演会 報告 他

アトリエ・エレマン・プレザン主宰 —佐藤敬子さん・肇さん夫妻—

三重県大王町、伊勢志摩の英虞湾を臨む丘にあるアトリエ・エレマン・プレザン。「エレマン・プレザン」とはフランス語で「現在の要素」という意味で、本学卒業生の佐藤敬子さんと、ご主人の佐藤肇さんが主宰するダウン症の作家たちのためのアトリエだ。ダウン症の作家たちが9名、月に2回通ってきて絵を描いている。佐藤夫妻は1989年まで東京で「世田谷版画工房」という絵画教室を運営していた。1984年に石川英太くんという知的障害をもつダウン症の子の作品に触れ、その感性に驚かされたという。1990年三重県大王町に絵画教室を移すと、そこでもうひとりのダウン症の少年、高木健一郎くんに出会いダウン症の人たちのもつ特有の深い感性に魅せられて、彼らの作品をもっと見てみたい一心で彼らのためのアトリエを開設、東京でも1993年から、石川英太くん他4人の作家を迎えて同様のアトリエをはじめたという。中井裕之さん、高木健一郎さん、上田幸絵さん、高山敦子さんが制作するアトリエを覗かせてもらうと、中央に二段になったターンテーブルが置かれ、その上に色とりどりの絵具の入った缶が置かれている。作家たちはその回りに座り、迷いのない筆の動きで目の前の紙を色で埋めていく。高木さんは一枚描き終わると必ず手を洗いに行く。そしてさらに紙を取りにいく。新しい紙を使って描くこともあれば、ポスターなどの上に絵を描くこともある。四角を描くことが多く、最近は四角で画面を埋めた後、筆を小刻みに振りながら画面の上いくつもの点を散らすのが彼のスタイルだ。佐藤夫妻は画材道具を準備するだけで、彼らの制作活動をただ見守っている。一貫して「教える」ことをせず、彼らの能力を「引き出す」ことに徹するのだという。

佐藤ご夫妻のこのダウン症の作家たちとの興味深い関わり合いについて、立石学長と広報課よりお話を伺った。

無為のアートが生まれるところ

佐藤(肇): はじめてダウン症の子の感性に出会ったときに、今までに見たことのない、私が芸術に求めていた世界がそこにあるような気がしました。これはひとつ、絵を描くということ以前に彼らはいいセンスを持っているんじゃないかと直観しました。今



ではダウン症のどの子にもそういう芸術センスがあると思います。そこのところはとも確信しているんです。保管している彼らの作品をすべて眺めていくと、発達段階というか、年齢ごとに大まかに共通する部分が見えてきたんですね。これはすべての作品を保管していたからこそ見えてきたこととです。そしてどの子にもセンスがあるからこそ、いかに引き出すかということが重要だと思っています。引き出し方を失敗してしまうと、彼らに変なプレッシャーがかかってしまう。彼らの持っているものを全



面的に受け容れて、環境を整え、引き出していくことができれば、どんどん未知の造形が出てくる。そこるところに造形の視点から興味を持っていいんじゃないかなということを感じるわけですね。

本来は福祉というのは個人の幸せをどうサポートするかという、それに尽きると思うんですね。環境さえ整えれば彼らは感動したものを生に、純粋に表現してくる、つまり非常に興味深い作品が出てくる、そうすると彼ら自身がハッピーになっていくわけです。そこにダウン症の人たち特有の文化

が見えてきます。それが絵になっている。さらに彼らのもつ穏やかな、自然と調和した世界、これを社会にしっかりとした形で提案してみるということをするれば、もっと世の中、障害を持った人以外の人たちもみんな含めて、もう少し柔らかい社会になっていくんじゃないかなという、そういう思いはありますね。

養護学校卒業後に通える学校を

立石: 東京の代々木では2002年から「エコール・エレマン・プレザン」という「学校」もはじめているということですが。

佐藤(敬): 私たちが三重に最初に来た当時に小学校の6年生くらいだった子たちが十数年アトリエに通い続けるうちに大きくなってきますよね。彼女たちが養護学校を卒業してから行くところがないんです。ある女の子は、「私、大学へ行きます」と毎日言うんですって。親は「365日言うんですよ、もうノイローゼなの」と困っていて。そのときに、「ああ、そうか、この子たち大学へ行けないんだ」と、「それじゃ作ってあげよう」と簡単に思っちゃったんです。その頃ちょうど東京のアトリエのメンバーが高校進学を考えていて、お母さんたちは「行かせられるようなところがない、もっと素敵な学校に行かせたい」というので、じゃあ、



ちょうどいい、お母さんたちがそれを望んでいるんだしたら、私もそれをしてあげたいし、作っちゃおうかという、代々木で生徒4人の「エコール・エレマン・プレザン」を始めることにしたんです。それがちょうど女子美の100周年記念の時でした。横井玉子さんは芸大に男性しか入れなかった時代に女子のための美術の学校がないという女子美を創立されましたよね。それで、「ああ、やっぱりそう思って学校を作った人がいるんだ、私もやってみたらできるかもしれない」なんて思っちゃったんです。とにかくただ毎日来て、絵が描けるほんの小さなスペースという環境だけ整えてあげればいいと思ったんです。実際の運営は私たちの娘がちょうどそういう仕事をしてみたいと言うので、娘と友達にすべて任せています。ただ、毎日というのは運営する方も、通う方も無理なので、週に3日だけということで始めました。絵を描いたり、造形活動をするだけです。お昼を挟んで、11時から3時までです。



上田幸絵「ビール」

学校をゼロからつくる

佐藤(肇):ダウン症の人たちというのは、コミュニケーションがあまり上手ではないですね。ところがエコール・エレマン・プレザンをやってみてわかったのは、コミュニケーションというのが非常に活発に行われ出したということです。エコール・エレマン・プレザンでは、教室のやり方の中に、「考えさせる」ということが入ってきたわけですね。どういうやり方をしたかですが、4人の生徒が集まって、机があってすべて整っていて、1年生として入学し…というのではなく、まずがらーんとした空間だけがあるところで、みんなで学校を創ろうと。そこから始まるわけです。学校が何であるか、まだわからないわけです。でも学校に行きたい、中学を卒業して高校生になる。みんな学校に制服を着て行っている、ああ

いうふうになりたいという。そのあたりから始まって。子どもたちと一緒に入学式をやるとなると、ではどんなのがいいかと聞く。すると子どもたちは入学式には校歌が必要だという。そうするとスタッフの方が、「うん、それはいい、じゃあ、それをつくろう」と。そうするとみんなで考えようという、みんながそれぞれ校歌を創るわけですね。4つの校歌ができて入学式のときにはそれぞれがそれを歌う。そういうのもとても興味深いし、面白い。そしてその次に、それじゃあ教室を作ろうと。最初は床の上だけでやっているわけですが、やはり机が要るなど。「じゃあ、どうする?」「自分の机を作ろうよ」と。そうすると、その机に絵を描きはじめるたりもします。それから学校には着替えを入れたりするロッカーが要ると。そうすると、何か物入れが必要だね、じゃあどこに作ろうか、どうやって作ろうか、どんな寸法がいいかと、図面をそれぞれが描くわけですよ。そして、スタッフが材料だけ揃えてきて、「これでどうするの?」と聞く。スタッフ側からは一切指示を出さないんですね。一つ一つがそういうやり方なんです。だから、何にも出てこなければ何日でもそのことについて話し合ったり、考えたり。何をやろうとしたかというのは、巣づくりなんです。自分たちの、ここが学校なんだよ、ここが住みかなんだよという、それを1年かけてやりました。で、自分たちの学校という意識がついて。その後、最初のうちは今日は絵を描きましよう、一つのカリキュラムでやっていたのですが、そのうちに私は洋服を作りたいとか、私は何々したい、と言い始めて、今はみんなばらばらのことをやっていってうまくいっています。そんな中で、例えばはさみが人数分足りなかったりする。すると、最初のうちは同時にはさみを使いたいときに、「貸して」「ダメ、今使っているから」というやりとりがある。そうすると、片方の子は黙ってずうっと待っているわけですよ。スタッフは貸してあげなさいとは言わないんですね。するとその子が、チラッ、チラッと見ながら、「いいよ」って貸すわけです。そこからコミュニケーションが始まるんですね。ですから画材、絵の具類、紙類は十分に用意していますけれども、そういう道具はコミュニケーションがうまく始まるように考えて与えたりしていますね。



記号化できないものを表現する

立石: 私たちは成長の過程の中で、物心がついてくると、言葉というものがコミュニケーションの非常に大きな部分を占めるようになっていきますが、そういういわゆるランゲージ・コミュニケーションだけではないヒューマン・コミュニケーション、それが1人ではない、「学校に行こう」から「学校をつくろう」ということを「自分」ではなく「自分たち」でやっていく中で培われてきているということなんですか。

佐藤(肇): そうですね。言葉、まあ記号ですね。そのこともとても興味深いことなんですけれども、彼らは言葉なしでお互いに伝わってしまうんですね。

立石: 人間以外の生き物は言葉を使う前に気配などで感じますね。犬でも猫でも、相手に敵意があるかないかというのは、かなり離れた距離でも感じる。つまり、逆に言えば人間は言語能力が発達して、その分、何かコミュニケーションのさまざまな他の能力をもしかしたら低下させている。言語能力を基準に伝わる、伝わらないと判断しているけれども、何か伝わる、伝わらないというのは実は五感だけではない第六感も含めて幅広にある。その辺がダウン症の人たちを通して見えてくるし、具体的にそういうステージを設けることで見えてきたということですね。

佐藤(肇): そうですね。そのところが私たちが一番興味を持つところなんですね。1997年に川崎市市民ミュージアムで展覧会を開いたときに、IBMに特別後援になっていただいたんですよ。IBMはコン



中井裕之「浜島のサメ」

ピュータの会社ですが、ダウン症の人たちの世界というのはコンピュータの対極にある世界だと僕は思っているわけです。ですからこの展覧会を開くときに、IBMの当時の取締役の方とお会いしたときに「入力できないものに、興味を持ってみませんか」と。そのときに共感していただき、展覧会の資金を出してくださったという経緯があります。

やはりあらゆるものが記号化されていく時代があって、記号化できないところがあるわけです。そこをどんどんふるいで落としてしまったり、針金のような細いものになってしまったり、雰囲気も何もなくなってしまおうと思うんですね。感覚器官ということですが、感覚器官は生命維持装置だと僕は思っています。味覚、視覚、そういうもの全部ね。その感覚器官、生命維持装置を人間はどんどん鈍らせていっている。

立石：ダウン症の人たちの外在化されたものには、芸術の力をそこから見返していくという働きがあるように思います。人類は歴史の中で、何万年も前から描くという表現行為を自然に行ってきたわけです。そこには純粹に描きたいという気持ちのみが存在する。しかし、いわゆる美術大学では、描き方というものを教えていくことになる。すると、一番原初にある「あっ、きれい」と感動してその気持ちを表す方法、それが制度化されることになってしまい、されればされるほど、システムの中でなぜ絵を描くのかという本質的なモチベーション

が薄くなっていく。ところがこのアトリエの作家たちの作品に直接触れたときには、「なぜ？」という前にもう「そうしたい」という強い感動が、そこに色と形になって定着しているのを感じました。表現の強さが、余計なものなしに表れていると。そういう表現に触れることで私たちは逆に、日常を見返す、振り返る、気づかされるという気がします。

「さんかくのこと」
 さんかくはうまい
 さんかくは やわらかい
 さんかく は かい
 おぼえにくいこと よくわからないこと
 むずかしいこと 知らないこと
 みんなもよくあること わかってないこと
 でも いいじゃない

 おしえる で はじめて
 わかっててもいいかげん なこと
 いいかげん な こと まちがっても かんちがいなこと
 まだおしえてない こと わかってない こと どうでも
 いいじゃない なんにもなくても
 べつに べつに べつに べつに
 いいじゃない

佐藤(肇)：彼らはある部分のアンテナが非常に鋭くキャッチしていく力を持っているともいえます。言葉の記号というか、言語能力、そういうものは非常に弱いんだけど、詩を書かせてみるとこれがまたびっくりするような言葉を使っていくんですね。

立石：言霊の言葉でしょうね。

佐藤(肇)：ええ、ありますね。言葉の情報量としては持っているものは非常に少ない。けれども、見事にその中から引っ張り出してきて、つなげていくというところに驚かされることがありますね。これなんかね(中央の詩) この健ちゃんはずっとほとんどしゃべらない。でもこの詩を読むと、「何だ、わかってんじゃん」と。(笑)

ダウン症の人たちのもっている世界

立石：人間というのは自分と他者という区別がついてくる時期から、何でも受けられるのではなくて、受けられるものと受け容れないものという差別化を当然していきますよね。食べられる、食べられない、あの人は好き、この人は嫌い。その中でだんだん憎悪とか敵意とか拒絶というもの当然生まれてくるわけですが、彼らを見てみると二十歳を過ぎててもマイナスの要素を感じないんですね。すべてをあるがままに受け容れているというあり方は、争いのない、ある意味で人の生き方の理想を体現しているのではないかと。だから何か欠けているんじゃないかと、むしろ欠けているのは我々の方なのではないかというふうに感じさせる。

佐藤(敬)：本当にそう思う。そのとおり。1997年に川崎で展覧会を開いたときに、三重の子どもの家族14人とバスでみんな川崎へ見学に行ったんです。二日間一緒にいたのですが、そのときのバスの中の雰囲気がすごくいいんですね。私は、ずっと小学校から進学塾の最初の走りに行っていて、中学を受験して…という競争社会にいましたから。すごく生きにくくて。でもそのバスの中でダウン症の人たちの持っている雰囲気を「うわあ、すてき」と思ったんですね。全然けんかもないし、会話もとっても和やかで不思議な空間なんですよ。



高山敦子「海がきこえる」

初めての世界ですよ。あっ、こっちの世界が本当だなんて思いました。

佐藤(肇): 彼らなりの調和する原理が見えてきますね。みんな生まれたときは、あるんですよ。それがなくなっていくところはどうしてなのかなと思うことはあります。夏になると合宿のような形で東京のアトリエからみんながくるんですよ。それでハルコちゃんという子がいつも下まで行こうって言って。下は海なんです。そこで石をボン、ボンと放るんですよ。そしてニコニコと笑うんですね。まとめて小さいのをバシャバシャと放るとニコニコニコと。波形と同じように笑っていくんですよ。そのうち、近くの石垣をグラグラグラ外して、それもボンと放ったんですね。そうしたらもうおなか抱えて笑い出してね。自分の想像以上だったんでしょうね。絵も全くそういう感覚で描いてしまうわけです。その辺が面白いですね。

夢のような話かもしれないけれど

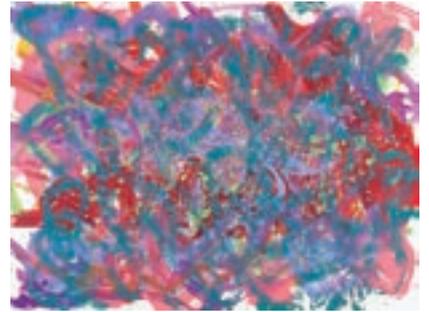
立石: お嬢様もエコール・エレマン・プレザンを運営されていますし、今後の継続はどのような形を考えていらっしゃるのでしょうか？

佐藤(敬): エコール・エレマン・プレザンでいうと、もう来年の春に卒業式なんです。4月からの2期生の募集も考えています。最初はプレスクールとして1年やってみようということで、やってみました。それで

4年間経って、「その後どうするの」という話しになったときに、やっぱり、いつも来て、描くことができる、さらに展示もして、それから、外部の人がもっと入れるようにしてあげる、そういうスペースを作りたいんですよ。もっと自由に生きていける場、アートセンターと言うか。もっと言ってしまうと、そのセンターの周りに草もあたらいいとか。牛も飼って、牛が草を食べていて、そのあたりが耕されて、そこが田んぼになればいいとか、そして、皆が年を取ってよたよたになった時にもそこに行けば安心みたいなおとこ(笑) お医者さん



がいたり、そこにレストランがあったり。そんな空間ができたら素晴らしいなあと思うんですけど。そうしたら若い人も年取った人も、絵描きも、そうじゃない人も、もっと自由に暮らせるんじゃないかと。あま



野村浩志「りんご」

りに何か漠然というか、夢のような話かもしれないけど。それが、全国に広がって、日本がそうならいいなあ。一歩ずつでも近づいていければ…。

<展覧会・シンポジウム案内>

この冬、東京でアトリエ・エレマン・プレザンのアーティストたちの作品展およびシンポジウムがおこなわれます。ぜひこの機会にご覧ください。

「アトリエ・エレマン・プレザンのアーティスト展(仮題)」

○聖路加国際病院

2005年11月1日(火)~2006年1月31日(火)

○永井画廊

2005年12月1日(木)~12月10日(日)(日曜休廊)

(企画・主催)

アトリエ・エレマン・プレザン 佐藤 敬子・肇

永井画廊 永井龍之介

(後援) 女子美術同窓会三重支部

シンポジウム 「医療から見たアート —美術史検証から見たダウン症のアート—

詳細は決定次第、下記ウェブサイトでご案内いたします。

<http://element-present.com>

佐藤 敬子

67年 女流画家協会展 (69年迄)

69年 女子美術短期大学造形科彫塑教室1回生

73年 モダンアート展 (リトグラフ)・版画「銚」展 (77年迄)

77年 国画会展 (彫刻)

81年 絵本出版 (コーキ出版) 「ハーメルンのふえふきおとこ」

91年 アトリエ・エレマン・プレザン設立

佐藤 肇

68年 自由学園卒

70年 世田谷版画工房開設

91年 アトリエ・エレマン・プレザン設立



高木健一郎「いろいろな四角」

Topics ● ① 高橋 秀氏インタビュー 別科 現代造形専修 特別講演会報告



1961年に安井賞を受賞。その後イタリアへ渡り、以後40年以上ローマで作家活動が続けてこられた高橋秀氏。豊かな曲線状のフォルムと明るい色彩から成るアブストラクトのエロティックな作品群から、「エロス」の画家と評されることの多い高橋氏ですが、具象、モノクローム、そして「エロス」の作品へ、さらには金箔を使った琳派的な装飾性の世界へと、常に自分の殻を脱ぎ捨てて新たな表現への挑戦を続けていらっしゃいます。

短期大学部別科現代造形専修研究室では6月3日、「今の日本と現代美術」をテーマに高橋氏の特別講演会を開催しました。ここでは講演会に合わせておこなったインタビューをご紹介します。

—「エロス」の表現と言われる作品の契機になったものはなんだったのでしょうか。

高橋：それは、イタリアに行く以前から既に変化しつつあったんですが、モノクロームの作品を作りつづけながら、精神的な非常に尖ったところに自分がいつの間にか追いこめられ…身動きできなくなったようなところまで追いこめられて。それ以外にもいろんなことがあって、その頃イタリアの作家たちと展覧会も一緒にしたりして、東洋西洋のぶつかりも感じたりしながら、とにかく行き詰ってモノクロームを突き詰めていくうちに、パッと壁の向こうに交差して出ていっちゃったんです。そのときにパッと、こう、モノクロームからすごい色が出てきて…。その色から今度はフォルムを求めていって、そこにエロスっていうのが出てきたんですけど、まあ、エロスっていうのはそもそもヒューマニズムであるというようなクソ理屈をつけてるんですが。要するに生命体、生命の根源。生命の一番もとのフォルム、あるいは、その成長。そこにエロスを見た、エロスを感じたわけです。それがエロスを意識した初めです。

—90年代の作品には琳派など日本の伝統的な美術の装飾性を感じさせる表現がありますが、イタリアで長年生活したからこそその表現なのでしょう。

高橋：日本人の血の中には既にああいうものが入ってると思う。ただ、それを自分で意識するかしないかっていうだけなのだけど。イタリアへ出掛けたときに琳派とか大和絵とかをなぞった作品を描くことだけはよそう、ジャポニカを売り物にするような小ざかしいことはやめるということを自分に誓って、意識的にそれを拒否してやってきました。だけど、一生懸命それをやっても、30年たってもイタリア人たちと一緒に展覧会やると「やっぱりおまえは東洋人だよな」って言われるのね。そういうものかなと思っていたんですが、で、35年過ぎたころから、人に言われるだけじゃなくて、あれだけ自分が否定していた情緒、情感的な絵画がいつの間にかまた自分の中に、自分の表現の中に戻ってきているのに気がついたんです。そのときに「何を今までかんでたんだろうな」と思って。じゃあ、もう、その最初の大和絵だ琳派だを拒否する、そんな姿勢はもうやめよう。自由奔放に、今、自分が望んでいることを、自分の中から湧いてくるものを、そのままやればいいじゃないかという気持ちになったのが今から10年ぐらい前ですね。それから、もう気の向くまま。意識的に琳派を採り入れております。

—このあたりの作品は（写真『アクロバット』）漆の赤や黒を彷彿させるのですが。

高橋：そのころは、いかに単純でいかに大きくするかということをして…要するに空間をどうつかんでいってかかっていうことを一所懸命にやっていた時代ですね。若い人たちにも言うんだけどね。同質であつたら大きい方がイイぞと。普通、作品を大きくすれば、どうしても、こう、たるみが出たり、質が落ちて言いたいことが薄らいでくるんだけど、そうじゃなくて「同質であればサイズが大きいほど発言は大きくなるよ」ということは言っています。しかも小品作るよりもむしろ3m、4mの大作を作る方が手ごたえがあって面白くて楽なような気がするけどね。

—これはベニヤに綿布を貼ったものですか。

高橋：うん。まずね、枠をずっと全部この形に作って。各フォルム全てにキャンバスを張って、それに3回から4回、のり置きをして紙やすりをかけて。で、またそれに1つずつ色を3回4回塗って。最後に



月の道 Moon Road 1961年 124.0×47.5cm



SUPERFICI-R5 1965年 116.5×72.5cm



受胎告知 1970年 182×168cm



アクロバット 1988-1989年 300×220cm

組み立てるんだけど。だから、こういう大作をシリーズで制作するときにはアトリエの中が、みんなこういう部品がわーっとぶら下がっているわけよ。食肉解体場の肉がぶら下がっているような感じでね。

—非常に緻密な計算がされているわけですよ。

高橋：一応、図面を作っています。で、パーツの裏に全部ナンバーが打ってあって。だから、こういう大きな作品は10点同時に制作進行するとかってというようなときもあって、そんな時はもう3日間ぐらい明けても暮れても赤だけ塗ってるわけよ。その次は黒だけとかね。それはもう単に職人仕事。でも面白くて楽しいですね。アートはアートっぽくね、一筆置いてはこう下がって悩んでいるっていうのには、「何やってるんだ」と思ってしまふ。あんまり大きな声出して言えないけどさ。

—エスキースは原寸で作られるんですか。

高橋：大体ね。3m、4mぐらいの作品になるとだんだん横着になって、A3ぐらいの大きさに作ったりもします。カーブなど拡大計算してやっていくもんですから。

—一寸分狂ってもいけない世界だと思わんですか。

高橋：それはね、何十年も同じことやってるんだから、そこらの大工さんと・・・そりゃ、引けを取るようじゃ(笑)。だから、全然関係のない友達に来て、私の製図台の上に計算機があったりすると「絵描きなのに、そんなに計算することがあるのか」なんて。まるで銭勘定でもしているかのような(笑)。

—先生は10年ほど前から倉敷芸術科学大学で教鞭をとられていて、18歳の方から22歳ぐらいの方に接してらっしゃるわけ

ですが、先生からみて最近一番驚いたようなことは何かありますか。

高橋：何ていうかな、あの若さでどうしてエネルギーがないんだっていうようなことかな。それで、気持ち悪いぐらい素直でしょう。もう少し抵抗しろよって言いたいんだけどもね。

—日本では受験戦争の中で、美大に入るために相当受験勉強をしていて、学生は入学したときには疲れてしまっているという。

高橋：そうそう、そうそう。だから私は倉敷の大学が開校するときに「どういう受験方法、受け入れ方法をするんですか」って聞いたら「いや、今までどおりの石膏デッサンで・・・」って言うから、せっかく今、新しい大学を作るならその受験方法も新しくしたらどうだって。実技としては丸・三角・四角を描かせなさいと、それだけでいいじゃない、だってその受験のために研究所に行ったやつは石膏デッサンなんかちよろちよろうまいこと描けるけど研究所もないところから受験に来た人たちっていうのはまず不利じゃないかと。丸・三角・四角なら、それを見ただけでその人の持っている素質っていうのが見抜けるじゃないかって言ったの。ところがね、結局、それは駄目なんです。高校の先生たちが「もうちょっと基礎的なことをやってくれなきゃ、われわれが教えている甲斐がない」って言って受けつけない。それをよしとしないんだね。数年前に「全国高校生現代アートビエンナーレ」というのを倉敷芸術科学大学で立ち上げました。この秋で3回展を迎えるんです。全国から、結構応募してくるんですが、その高校生の出品作を眺めているとね、「ああ、まだまだ日本は見捨てたもんじゃない」っていうような作品が集まってくるんですよ。ところが、やっぱり先生によりけりなんでしょうね。一つの高



Volterra '73 1973年 750×924cm



トップモデル Top Model 1998-1999年 90×125cm

校からダラーッと、同じような作品がたくさん出てきたことがあって、「なんで1人がこんなに何点も出品しているんだ」って思ったんだけど、実際は全部違う生徒が描いたもので、先生によって全部絵が同じになっちゃっていたんだよね。これはひどいなと、生徒じゃなく先生の鍛え方に問題があるなど。—美術の道を志す学生たちに何かメッセージをいただけますか。

高橋：私は40年間「日本」を意識してイタリアで暮らしてきたんです。それで「日本は素晴らしい本当の『日本』に戻らなければどうしようもないのではないかと」常々感じています。若者にも、日本人である、日本に住んでいる、日本で生活しているということ、意識しないで過ごすのではなく、どこか生活の隅で感じてほしい。特に今のような、こう、中国だ韓国だとガタガタしているようなときには、自分は日本人としてどうしなきゃいけないんだということをもう一遍確認しながら毎日生活してくれないかなという思いがある。そうすることによって、本当の日本、つまり人間としての思いやりのたくさんあった日本人、助け合いの精神を持って、諍いなく、我を通さない日本人っていうのをどこかで取り戻していかなきゃいけないんじゃないかと。美術に携わる人はなぜ絵を描くのかを掘り下げて、突き詰めてほしい。そうすると、ただ自己主張のためだけに描くのではなく、見てくれる人を勇気づけたり、なぐさめたり、人に喜んでもらう気持ち、それを持っていることが重要ではないかと。つまり人への優しさだね。まず人に会ったら挨拶ができるとか、人を気持ちよくできる人になること。その上でいろいろな方向に各自の世界を伸ばして行ってほしいね。

(インタビュー・文：広報課 林 亜紀子)

高橋 秀 (たかはし しゅう)

広島県新市町(現福山市)生まれ

1961年 第5回安井賞受賞。

1963年 渡伊。ローマ美術学校に学ぶ。

1968年 第8回現代日本美術展受賞。

1976年 ヴェネツィア・ビエンナーレに出品。

1987年 芸術選奨文部大臣賞。

1988年 第20回日本芸術大賞受賞。

1993年 ローマ国立近代美術館で高橋秀・ローマ30年展開催。

1994年 紫綬褒章受章。

NEWS ● ① 三谷青子客員教授「旭日小綬章」を受章

本学大学院美術研究科の客員教授でおられる三谷青子先生（日本画家）が、春の叙勲で旭日小綬章を受章されました。三谷先生は1965年から講師を経て、1971年より本学芸術学部絵画学科日本画専攻の専任教員になられ、1986年から1992年に渡り、日本画専攻の主任を務められました。1994年からは本学大学院において教鞭をとられ、現在も、後進の指導を熱心に行っておられます。



三谷青子

1928年 京都市に生まれる
 1948年 日展初入選 以後入選
 1949年 京都市立美術専門学校卒業
 1952年 同研究科卒業
 1954年・58年 日展特選
 1965年 女子美術短期大学非常勤講師
 1970年 日展菊花賞
 1971年 女子美術大学助教授
 1974年 日展審査員 以後5回
 1977年 文化庁賞上
 1979年 日展会員賞
 1987年 女子美術大学教授
 1988年 日展内閣総理大臣賞
 1994年 女子美術大学大学院教授
 2001年 女子美術大学大学院客員教授
 2005年 旭日小綬章受章



「藁の家」 72.7cm×100cm 2003年

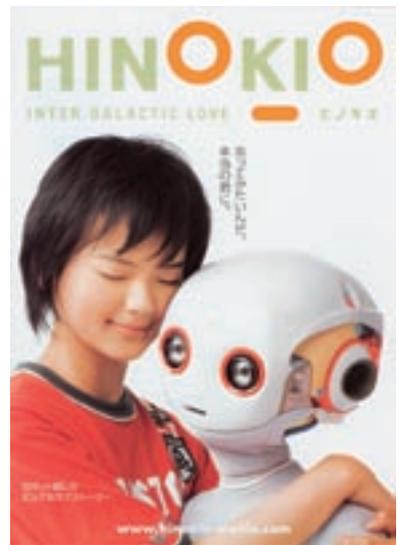
NEWS ● ② 映画「HINOKIO」にメディアアート学科が製作協力

芸術学部メディアアート学科では、7月に公開された映画「HINOKIO」（監督：秋山貴彦氏）におけるプリプロダクション（Pre-production）を手伝いました。プリプロダクションとは実際の映画撮影前の作業を指します。その中でも特に重要なアニメティクスと呼ばれる撮影前に撮影をシミュレーションする「動くストーリーボード」の制作を行いました。制作はメディアアート学科の重要な実技科目「プロジェクト&コラボレーション演習」の中で、2003年度に3年生だった12名の学生たちがプロジェクトチームを結成して大学内で行いました。プロジェクトチームの学生たちは、授業時間を越えて6ヶ月間かけてアニメティクスの制作を行いました。

映画「HINOKIO」は、心が傷ついて部屋に引きこもった少年がロボット「HINOKIO」を使って学校に行くことから物語が始まります。秋山貴彦監督は、20年間暖めてきた構想をもとにオリジナルストーリーを作成し、見事にヒトとヒトのつながりを描くピュアで大きなラブストーリーを描いています。この素晴らしい映画にメディアアート学科は深く係わることができたことをとても嬉しく思います。

<http://www.hinokio-movie.com/>

（芸術学部 メディアアート学科教授 内山博子）



©HINOKIO FILM VENTURER

NEWS ● ③ 爽やかな風を！ —環七梅里立坑到達工事の工事パネルの装飾—

現在、環状七号線に面した梅里公園の敷地の一部で、神田川・環状七号線地下調整池梅里立坑到達工事が行われています。このたび、工事パネル装飾を短期大学部造形学科デザインコースの学生たちが制作しました。この装飾は立案から制作まで全て学生たちの手で行われ、テーマは「爽やかな風を！」。「環状七号線を通る熱い風、東京の元気が行き交う交差点。住んでいる人と通過する人の交わりあう地点。北斎の知恵を借りて、涼風を送り続けたい。住民の皆様にとって気持ちのよい空間をつくりたい」というコンセプトで制作しました。細かく切ったシートを一枚一枚丁寧に貼り合わせて作り上げた装飾は、工事が完了する平成18年1月ごろまで展示される予定です。



NEWS ● ④ 女子美ウェブサイトリニューアル

みなさんお気づきでしょうか？5月より、女子美公式ウェブサイトが全面リニューアルされました。今回は「女子美ちゃん」がアイコン的存在として大活躍しています。なお、トップページの楽しいFLASH画像も毎月更新していきますので、是非お見逃し無く！また来月もお楽しみに。女子美ウェブサイトでは、今後も様々な情

報をリアルタイムに掲載していきます。学内外を問わず、『女子美に関する情報』を広報課までお寄せ下さい。たくさんの情報、お待ちしております。

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

(広報課 TEL:03-5340-4513 MAIL:prs@joshibi.ac.jp)



NEWS ● ⑤ 相模大野中央公園にシャッター絵画

大学院修士課程美術専攻洋画領域2年の喜田小百合さんが相模原市の公園課に依頼を受けて相模大野中央公園管理事務所（パークハウス）のシャッター4カ所に絵画作品を制作しました。相模大野地区の市民の憩いの場である相模大野中央公園。喜田さんの作品には同公園のコンセプトとなっている「花と水と緑」が描かれています。「パークハウス」の東側の壁面から北側を通り、西側にいたる流れにそって時間が流れてい

るということで、東側は「水」を表し、命の源、起源を、北側は「緑」を表し、成長、活動を、西側は「花」を表し、実り、到達をそれぞれ象徴しているそうです。また、各壁面には全て、人間の祈りがこめられており、人間らしい色、生きているというものを基本として彩色しているとのこと。公園を彩るキャンバスとして来園者の目を楽しませてくれそうです。



NEWS ● ⑥ S(相模原キャンパス)ーS(杉並キャンパス)ウォーキング

スポーツ演習（フィールドウォーキング）授業の一部として計画された「SーSウォーキング」が6月12日に24名の学生が参加して実施されました。午前9時に相模原キャンパスを出発した一行は6月としては異例の暑さの中、52号線から3号線（鶴川街道）へ入り小田急線鶴川駅近くの妙行寺境内で30分間の昼食タイム。その後3号線を進み、多摩川を渡り、砧から428

号線で永福町方面へ、方南町を通り杉並キャンパス到着は午後5時30分過ぎ、最後尾でも午後6時には辿り着きました。完全踏破したのは16名。表彰式で金メダル(中はチョコ)と“FINISHER”とプリントされたTシャツが贈られました。9時間かけて40キロ弱を踏破した闘士たちは、「次回も参加します！」と言い残して、長い一日を終え家路につきました。残された万歩

計は5万歩を示していました。

(保健体育研究室)



NEWS ● ⑦ 映画「忍ーSHINOBIー」に刺繍研究室が制作協力

短期大学部造形学科デザインコースクラフトデザイン系刺繍研究室では、映画「忍ーSHINOBIー」に出演する仲間由紀恵さんとオダギリジョーさんの衣装の刺繍を委託され、研究室をあげて協力しました。オリエンタル調の花や、忍者が用いる手裏剣風のデザインなどです。映画鑑賞の折には、ぜひこれら衣装に施された刺繍もご覧下さい。この映画は9月17日から全国松竹系で公開されます。



NEWS ● 8 女子美にキティちゃんがやってきた!

「ハローキティ30周年記念イベント」の一環として開催されました『ハローキティワールドグッズコレクションフェア』(7月26日～8月1日:日本橋三越本店にて開催)において、女子美の学生がキティちゃんをテーマに制作した作品を展示しました。展示された作品は、キティちゃんの作者である、本学卒業生の山口裕子さん(芸術学部産業デザイン科デザイン専攻(現デザイン学科)卒)によって学内コンペ形式で審査が行われ決定しました。なお、会場では、女子美を紹介するプロモーションビデオが上映されました。

さて、7月12日、このプロモーションビデオの制作に伴い、キティちゃんが女子美の杉並キャンパスにやってきました。食堂でのランチ、絵画、付属中学・高校生とのクラブ活動など、キティちゃんが1日女子美生になりました。当日、学内では、突然のキティちゃんの訪問に、あちらこちらで歓喜の声があがり、大変賑やかな一日となりました。

なお、『ハローキティワールドグッズコレクションフェア』は、関西地区の百貨店にも巡回しました。



NEWS ● 9 「小倉家住宅」安全柵に女子美生の壁画

神奈川県大和市北部を東西に走る矢倉沢往環は、江戸時代、東海道の脇往還としてにぎわった道で、この街道沿いには多くの旅籠や商家が存在していました。小倉家住宅は鶴間宿に残った大和市内唯一の近世商家遺構で、平成7年、9年に大和市の有形文化財として解体保存されていました。平成15年度から同家住宅復元工事を実施して移築復元しており、歴史資料館として平成

18年4月の開館を目指して建設工事が進んでいます。工事着手と共に建設地の周囲に安全柵を設置し、その安全柵に短期大学の学生たちが壁画を描きました。壁画には江戸時代の洋学者である渡辺華山が相州厚木へ旅した様子を書き記した「游相日記」の挿絵を題材にした絵が描かれており、通りかかる人の目を楽しませています。



NEWS ● 10 教育フォーラム2005

8月5日(金)、本学主催の『教育フォーラム2005 美術教育の「今」と「これから」』が、国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室で開催され、小・中・高等学校の図画工作・美術科担当の教員や教員志望者など131名が参加しました。主催者代表として立石学長の挨拶があった後、第1部として本学客員教授の遠藤友麗先生より、『美術の「教科性」と今後の展望』と題した基調講演がありました。午後からの第2部では、教育現場や教育行政の立場から4名のパネリストを招き、「図工・美術の

新たな展開・学習指導要領の改訂に向けて」をテーマとした事例発表があり、続いてフロアとパネリストの間で質問や意見とそれに対するコメントや熱心な補足説明などが交わされました。

【基調講演講師】遠藤友麗 本学客員教授 元文部科学省主任視学官【パネルディスカッション】パネリスト:岩崎治彦(東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育課指導主事)、宮下幾子(神奈川県横浜市立日吉台中学校教諭)、金子一夫(茨城大学教育学部教授)、北川フラム(本学芸術学部芸術学科教授)、コーディネーター:佐藤善一(短期大学部部長)、コメンテーター:遠藤友麗(本学客員教授)〔後援〕東京都教育委員会



Topics ● 2 公募展受賞者紹介

JFA FUR DESIGN CONTEST 2005

入賞(一次審査通過)

木田景子(芸術学部 ファッション造形学科4年)

現代美術家協会第61回展

立体造形の部 入選

野崎理美(芸術学部 立体アート学科4年)

ユナイテッド・シネマ CG & アニメーション・フィルム・フェスティバル 2005

準優秀賞

孝橋茉莉江(大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 メディアアート造形領域1年)

Series ● ● シリーズ 卒業生の美術館① 丸木美術館

今号より卒業生の美術館をシリーズで紹介していきます。第1回目は、「原爆の図」で有名な画家、丸木俊先生〔1933年西洋画部卒（2000年没）〕とご主人の位里氏の作品を常設展示する丸木美術館です。埼玉県東松山市、都幾川の清流のほとりにあり、周囲には自然が広がっています。水墨画家の位里氏と油彩画家でデッサンを得意とした俊先生は、原爆投下直後に位里氏の実家のある広島に入り、救援活動を手伝った経験から、32年間に渡って被爆者たちを共同で描き続け、「原爆の図」は1950年に発表した「幽霊」から1982年発表の「長崎」に至る15部作の大作となりました。どの作品にも声を失った人たちの痛みと悲しみが見事に閉じ込められており、静かにこの暴力を告発しています。今日、私たちは丸

木夫妻の平和への願いとは逆に、イラクでは劣化ウラン弾が使用されるという現実を生きています。ぜひこの機会に美術館に足を運び、作品を観賞することで、丸木夫妻が一生を賭して描くことで人々に伝えようとしたメッセージを感じとってください。

(広報課 林 亜紀子)

<2005年度の企画展>

戦後60年企画 今日の反戦展2（仮称）

—9月13日(火)～10月28日(金)

丸木位里没後10年展（仮称）

—11月1日(火)～2006年2月17日(金)

核が作り出した光景 豊崎博光写真展（仮称）

—2006年2月21日(火)～3月24日(金)

丸木美術館のホームページ

<http://www.aya.or.jp/~marukimsn/>



原爆の図 第8部「救出」

Topics ● ● ③ 女子美オープンキャンパス2005

7月17～18日、オープンキャンパスが杉並・相模原、両キャンパスで開催されました。受験生及び地域般住民の方々など、両キャンパス合わせて2869名もの参加があり、学内は大変賑やかな2日間になりま

した。女子美のオープンキャンパスの目玉は、何とんでも、実際に女子美の工房や設備を使用し制作・体験する“ワークショップ”です。今年も、各学科の研究室のアイデアで、数々の楽しいワークショップが

多数企画されました。訪れた参加者は、暑さも忘れ、様々なワークショップで、思いのオリジナリティ溢れる作品を制作・体験し“モノ作りの楽しさ”を満喫していたようです。

杉並キャンパス



相模原キャンパス



Essay ● ● ● パリ5年目の夢。 —野口香子（アーティスト）—

パリにある国際芸術都市に毎年受賞者を研究員として派遣する「女子美パリ賞」受賞をきっかけに渡仏。現在もパリを拠点に活躍している野口さんに作品制作やパリでの生活のことを寄稿いただきました。

《私は突然、双子混血男児の母である。一人は愛らしい顔の真ん中に、ただひとつの栗色の目。もう一人は、やはり父似の栗色の目が三つ何とも言えない心地よさで並び、こちらを見ている。三つ目のほうは、瞳の中にちいさなほくろがそれぞれ一つずつ。私はこれらの息子を大変誇りに思っていて、皆で自然史博物館に遠足である。》

これが、昨日私が見た夢で、カフカのグレゴール・ザムザの朝には程遠いし、まあよくあるシュールな夢の類いかとも思ったが、目が覚めた後も妙にリアルな感触が残っていた。それで起きてすぐ数学者のうちの夫に話したところ、かなりうけていた。それから、これが何を意味しているか30分ばかりかけて、熱心に彼なりの分析をしてくれた。つまるところ、今とりかかっている絵画作品の想念みたいなもので、双子の男児は間違いなく私の着手中の作品を意味していて、そして親切にも、彼は今度のシリーズに実は結構期待しているとのことのおまけつきである。期待の方は、ありがたく受け取っておくとして、やはり作品というのは自分の子供みたいなものなんだろうかと、あまりに短絡的な夢にちょっとびっくりしてしまった。

まあ、この夢にさまざまな現実をも見せつけられながらも、どうにか気を奮い立たせ、5月になり陽も入るようになってきたパリ5区のがわがアトリエで、来春大阪で行われる予定の展覧会の準備に気合いをいれてとりかかることにした。今回は絵の他に、ビデオ作品も持っていくつもりなので、最初からかなりばたばたしている。



「舟の種子 2004 220×365cm (岩絵具・膠・銀箔・墨・麻紙)
国際芸術都市イギリス館(フランス・パリ)にて 写真:Philippe SEBRIOT

【パリとの出会い】

今から4年前、女子美パリ賞をいただいた。付属中高そして大学と10年通った母校からの思いがけない贈り物に、心弾ませてパリへ出発。翌年、文化庁在外派遣員として、その翌々年にはポーラ美術財団在外研究員として、計3年間パリで制作活動に専念する機会に恵まれた。最初の2年間は、パリ4区の国際芸術都市(シテデザール)に滞在。女子美のアトリエは隠れ家のような古いパリの面影をのこす一角にあって、私はとても気に入っていた。この頃だと記憶しているが、女子美の立石先生と、笠井さんと3人でパリ郊外のセルジュポントワーズまで、フランス人建築家ダニ・カラヴァンの巨大モニュメントを訪ねたのを思い出す。最近では毎春、パリ新国立図書館などを手がけたドミニク・ペローの建築事務所で働く男の子らと、パリ南のソー公園で花見の企画などしているが、パリに来たばかりのこの頃に建築を見始めるようになったように思う。

その後は、やや学校風の中央棟にうつり、つたの絡まる巨大なレンガの壁を遠景に眺めながら、さらに1年間を、この芸術都市で過ごすこととなった。そういえば随分後になって、パリ日本文化センターの講演に呼ばれて来仏していた高階秀爾先生から「振興会のアトリエ審査の時、ワタシがね、この人がいいからっていったんだよ。」と直接聞かされたときはうれしかった。高階先生に、私の知らないところで応援してもらったのは、2回目だったからである。そんなこんなで国際芸術都市ではアーティスト同士の交流(飲み会?)も満喫しつつ、パリでのコフィム賞受賞者展、芸術都市ギャラリーでの個展、パリ6区のギャラリーでの個展、東京でのVOCA展のための準備などを行った。また3年目は、パリの南14区の国際学生都市内の芸術センター主催のアーティストプログラムに年間通して参加した。私はイギリス館の天井5メートルのアトリエで制作できることになり、ここでアトリエ公開展などを行った。

【パリの生活】

パリの生活で気に入っていることは、様々な展覧会、オペラ、ダンス等に遭遇できることである。パリのオペラ座は7等切符(千円位)で見える席で(!)毎月見に行ける。そういえば、映像作家のビル・ヴィオラが舞台



「身振りの梯子(はしご) (岩絵具・膠・銀箔・墨・麻紙)

美術をやっている5月のトリスタンとイソルデに行き損ねたのが残念。また最近、展覧会で見て面白かったのは、ロンドンのパービカンギャラリーで見た、ティナ・バーニー(この人はアルルの写真祭にも出していた。)と、クリスチャン・マークレイの膨大なエネルギー。あと、ナショナルギャラリーのカラヴァジオ展は壮観だった。4月には、船越桂さんの展覧会のオープニングで行ったドイツのハンブルクで、偶然にもジョン・ヌイマイヤーのバレエの切符が手に入り、昼から飲み過ぎてふらふらの頭で行ったにもかかわらず、結構楽しめた。

昨年暮れは、夫が日本の大学に呼ばれたので京都旅行の機会があり、長谷川等伯の障壁画に念願の再会をしたり、また子供を生んだり(これは夢じゃなくて現実で、混血女児で2つ目である。いつも午後元気に、自宅から徒歩一分の保育園へ行っている。)で、ここには書けない事もたくさんあるがそれはまたの機会にしたい。

最後に、在学生にメッセージをとということなので、どうしようかと色々考えたが難しすぎて思い浮かばない。何だろう。今自分にできることを、とにかく全力でやるしかないとことかな。



1993年女子美術大学絵画科日本画専攻卒業、2001年女子美パリ賞受賞、2002-03年文化庁派遣研修員(パリ)、2003-04年ポーラ美術財団派遣研究員(パリ)、2002年ファンデーションコフィム賞受賞者展(パリ)、2004年VOCA展(東京上野の森美術館)、他個展グループ展多数。

Topics ● ④ 就職だより ～学生支援センターから～

就職決定率が
芸術学部89%、短期大学部78%に

就職活動を取り巻く環境は、依然として「早期化」「長期化」「厳選採用」であり、内定獲得は容易なことではありません。またデザインなどの専門職を志望する場合は、少ない採用人数を他大の新卒者ばかりでなく、キャリアを積んだ中途採用者とも競合しなくてはならず、実力を証明する作品プレゼンテーションや熱意のある志望動機と自己PRなどが求められています。

このような環境の中、芸術学部の就職決定率は平成16年度89%と昨年の90%に引き続き、美大の中では極めて好調を維持しています。また、短期大学部では就職決定率78%と昨年の63%から大きく躍進しました。平成17年度から芸術学部の新設3学科206名が卒業を迎え、学生は試行錯誤を行いながらの就職活動でしたが、新設3学科の平均就職決定率は92%と芸術学部就職決定率89%を上回る好結果を残すことができました。

就職以外の進路では、短期大学部で全学生の45%が進学の進路を選び、本学や他大への3年次編入や専攻科へ進んでいます。また、芸術学部でも全学生の15%が本学や他大学の大学院などに進学しており、就学意欲の高さが伺えます。

平成17年度は企業の採用意欲が高まり求人が増加していますが、企業は欲しい人材でなければ採用しない「厳選採用」の姿勢を崩している訳ではありません。しかし、根気強く就職活動することが就職に結びつくことに間違いはありません。就職活動中の方、就職活動を一時止めてしまった方は、学生支援センターへ是非相談に来てください。お待ちしております。

職種案内

商業デザイン
グラフィックデザイナー
パッケージデザイナー
キャラクターデザイナー
CGデザイナー
コピーライター
イラストレーター
販促・広告宣伝、販下、他

編集・マスコミ
編集
レイアウト
校正
ディレクター
アナウンサー、他

工業デザイン
インダストリアルデザイナー
木製品デザイナー
商品開発
玩具デザイン、他

教職
教師
講師
助手

繊維デザイン
テキスタイルデザイナー
刺繍デザイナー
染織、他

専門系一般職
ファッションアドバイザー
ショールームアドバイザー
専門性の必要な一般職、他

建築・室内装飾
建築製図
スペースデザイナー
インテリアデザイナー
インテリアコーディネーター
ディスプレイデザイナー
エクステリアデザイナー、他

一般職
一般事務
営業
販売、他

服飾・雑貨
ファッションデザイナー
パタンナー
縫製
靴、靴デザイナー
ジュエリーデザイナー、他

コンピュータ・その他
システムエンジニア
プログラマー
インストラクター
スタイリスト
学芸員、他

平成16年度卒業生進路状況

大学・短期大学部別就職・進学状況

(平成17年5月20日現在)

	院・学部・科	修了・卒業生数	就職希望者数	就職者数	進学者数	求人社数
大 学	大 学 院	33	13	12	5	2103
	芸術学部	634	323	289	93	
	計	667	336	301	98	
短期大学部	専 攻 科	67	11	10	10	
	造形学科	283	65	51	127	
	計	350	76	61	137	

平成16年度卒業生就職状況

業種別就職状況

【大学 芸術学部】

広告・デザイン	15%
服飾	15%
印刷・出版	13%
玩具・文具・音楽	13%
皮革・貴金属	8%

【短期大学部】

広告・デザイン	12%
服飾	12%
建築・不動産	10%
印刷・出版	10%
その他	16%

主な就職先

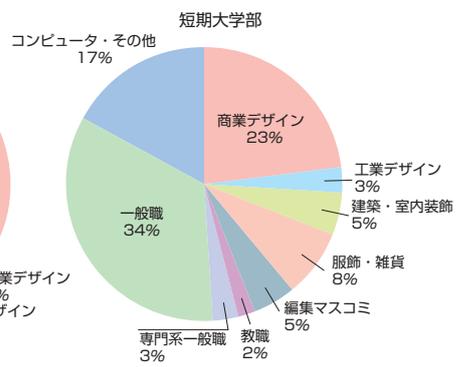
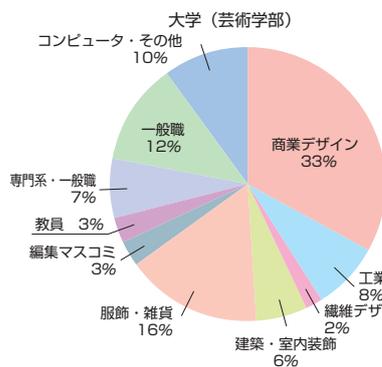
●大学 芸術学部

アトラス、イオリ、伊勢丹、伊藤屋、ヴァンドームヤマダ、エトロファーイースト、エフ・ディ・シィ・プロダクツ、オー・エル・エムデジタル、キーコーヒー、キャビア、ケイ・ウノ、コナミ、サカモト、サロンジエ、サンエー・インターナショナル、秀光、スタージュエリー、スパイス、セガ、セキグチ、ティ・ディ・エス、テレビ朝日クリエイティブ、東京アドデザイナーズ、東北新社、常磐薬品工業、ナカバヤシ、ナムコ、任天堂、白鳳、白山陶器、ハピネット、東日本旅客鉄道、ヒロモリ、ファイブフォックス、ミドリ、ライトパブリシティ、レイメイ藤井、レック、ヨウジヤマモト、ヨネックス、ワールド、ワコール、他

●短期大学部 造形学科

アートプリントジャパン、アクベ、伊勢丹、ウエダジュエラー、オンワード樺山、河淳、クインバック、資生堂販売東京第二営業部、SPACE DUO建築研究所、タナカグラフィカ、大東紡織、テックス、ナルミヤインターナショナル、日本放送協会、日本クラウンコルク、リムコーポレーション、スティング、富士急ハイランド、別大住建、マルイアクセス、ワコール、他

職種別就職状況



J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

展覧会開催報告

< JAM > 「JAM session 2005 女子美教員作品展」

女子美で教鞭をとる教員の作品展として、2002年に第1回を開催し、今回が2回目となります。会期を2部に分け、前半に絵画・彫刻・工芸などのアート系を、後半にデザイン系の作品を展示いたしました。普段は学生を指導している先生方の作家としての本領が発揮され、展示された作品からは創造力が強く表現されていました。会期中に28回開催した出品教員によるギャラリートークでは、作品を前に制作の動機や技法、作家としての生き方などが熱意をもって語られ、多くの学生に感動を与えました。

(4月13日～7月25日)



< ガレリア ニケ > 「美の仕事 PART II 絵本の世界展」

毎春ガレリア ニケで開催される女子美術大学同窓会主催の展覧会です。この展覧会は、前年の「美の仕事 女たちのランウェイ」に継ぐものとして企画されました。多くの女子美卒業生が絵本の世界で活躍しています。その中から絵本作家として、安藤由紀、小澤摩純、なかやみわ、長野まゆみ、野田凧の5氏と、絵本を扱う学芸員として松岡希代子氏の仕事を、原画と絵本の展示によって紹介しました。その他、絵本の世界に関わった数多くの卒業生の絵本も多数手にとって読めるように展示し、紹介しました。会場で2回行った絵本読み聞かせの会は、子どもにも大人にも楽しい時間を与えてくれました。

(5月23日～6月4日)



展覧会案内

< JAM > 「Ten Colors 活躍する若手女子美卒業生展」

女子美出身若手クリエイターを特集し、その活動と作品を紹介する展覧会です。柔軟で自由な発想と想像力から生み出される彼女たちの作品はまさに十人十色です。多彩なフィールドで創作活動をする卒業生を特集することで、現役大学生にはよりよい将来の展望を描く指針となり、一般の方々には社会の創造的活動の一端を担ってきた女子美卒業生たちの素晴らしい成果をご覧いただけるような展示構成にしております。

会期：2005年9月14日～10月23日

会場：女子美アートミュージアム
(相模原キャンパス内)



Topics ●●● 銀座アートエクステンションスクールの活動

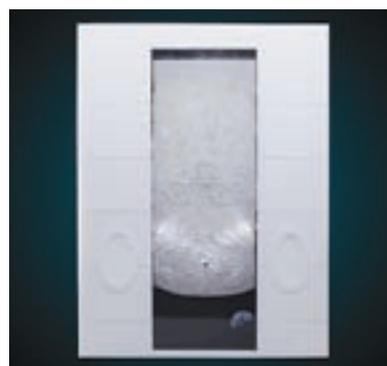
銀座アートエクステンションスクールとは、関東にある主要な美大で組織するもので、新しい美術の可能性の探求と銀座の街の活性化を目的としています。

この活動の一環として、「広がる・銀座まちづくり つながる・銀座の道 美大生の提案」という展覧会が7月29日(金)～31日(日)までINAX銀座ショールームで開催されました。この展覧会は本学、多摩美術大学、日本大学芸術学部、武蔵野美術大学で都市、建築、環境を学ぶ学生を対象に、授業で銀座の街をフィールドとした共同課題の成果を発表するものです。29日には公開講評会も実施されています。女子美からはデザイン学科の4年生約30名が「美術館・ギャラリー」「子供の空間」という課題に取り組みました。講評会では他大学の学生や

先生方と活発な意見交換がなされました。作品発表をした牛山さんは、「講評会で各大学の違いを感じた。女子美は型にはまらない柔軟な発想ができる大学だと思った」と語ってくれました。

今年3月には各美大の学生が有名店のショーウィンドウ空間を提案する「銀座スペースデザイン学生コンペティション」の企業賞の発表があり、女子美の学生は天賞堂(デザイン学科2年 筒井あすかさん、綱木愛さん、田中珠理さん制作)と越後屋(メディアアート学科3年 及川綾織さん、出山裕美さん制作)の2つの企業賞を受賞しています。このうち天賞堂賞の作品「軌跡」をもとにしたディスプレイが、10月1日から約1ヵ月間天賞堂を飾ります。銀座に行ったらぜひご覧ください。

(企画課 笠井 真一郎)



「軌跡」 撮影:田代 衛司



公開講評会

Series ● ● ● — シリーズ歴史資料紹介⑪ — 創立者のひとり 横井玉子先生 I



横井玉子先生 明治29年

本校創立者の一人横井玉子先生ご生誕150年にあたる2004年秋、凜として未来をみつめる美しい胸像が完成した。ここに初めて百年の礎を築かれた佐藤志津先生とお二方が並び、女子美の基が整った。この先駆的な学校を創り支えた思想とは何だったのか。原点に立ち返り考えれば『思想』という文字は『思い』と『想い』の二つを重ねていることに気付く。国のため、人のために役立ちたい時、どうすれば最善の道が創れるかという玉子の深い心が形となり、行動となった。玉子は長い時間をかけ女性の幸せについて悩み抜いた。男性とは異なる女性特有のこまやかな美意識を衣食住に生かせば、もっと喜びの伴った生活になるのではないかと考え、そのための学校を設立し、女性が自立出来る経済力を持たせるということに思い至ったのである。そこで玉子が実際にどのように人生を創っていったのか、その軌跡を辿りたい。広報誌150号、151号に、女子美のルーツに熊本洋学校教師ジェーンズ夫妻と、横井一族からの影響を記載している。前者からは男女平等を、小楠からは圧政に苦しむ民衆を救うためには、組織規則で心まで固められた徳川体制をどうすれば切り崩せるかについて学んだ。横井小楠は、人々が恐れて言えなかった、参勤交替制度廃止、江戸表諸侯室棟(奥方)制度廃止、天皇親政、大政奉還、海軍力強化、学校設立等の意見を国是七、十二条に纏め、小楠を政治顧問とした松平春嶽に提出した。それは將軍への建白書となり、龍馬の船中八策となって国を動かした。視野を広く世界に求めたその精神は玉子にも濃く伝わり、先駆的なその思想を実現させることになる。玉子は安政元年(嘉永7年・1854年)江戸鉄砲州(東京築地明石町)武家邸の並ぶ

細川家藩邸で原尹胤^{はらまさたね}の次女として誕生した。家老の娘にふさわしい稽古ことや、漢学を修め、背のすらりとした色白の美しい娘であった。黒船来航大揺れのさなか、江戸湾内の品川、佃島、明石町等に台場が築かれ、当時最高の学問は砲術をオランダ語の原書で学ぶことで父はその師範でもあった。佃島と向き合う隅田川に沿ったその邸は、同じ九州の大名中津藩奥平家と隣接しており、安政5年(1859年)蘭学塾(慶応義塾大学)を開いた福沢諭吉もそこにいた。同邸内で杉田玄白等により解体新書が訳されたのは1773年である。又、幕末の騒ぎをよそに諭吉の著書「西洋事情、西洋旅案内、学問のすすめ」等も発行されていた。進取の気に溢れたこのエリアで感性豊かな少女は、変わろうとする日本のエネルギーを見事に受け留めながら14才までを過ごしたのである。代々江戸詰めの家老邸であった原家では、爛熟した文化の一つ塗物の調度品、膳や碗の食器、豪華な日本刺繍の着物帯も日常のものであった。築地を外国人居留地とするために立ち退きを命ぜられた慶応4年、一家は熊本に赴いた。熊本洋学校で玉子はジェーンズ夫妻に会い、そこで英語と料理、洋裁を習うことになる。そのことが西洋と日本文化の比較へとつながり、女子美開校当初より日本美の特徴として、蒔絵刺繍が西洋画、日本画、彫塑、造花、編物、裁縫と共に独立した科として設けられた。昭和、平成の時代行われた皇族の婚礼や即位式の十二単衣等の制作は、女子美刺繍科関係者によってなされたのである。明治5年(1872年)玉子は横井左平太と結婚し、官命で夫は再渡米したが、同8年には結核のために帰国。玉子の必死の看病も空しく僅か20日間で死去(31才)。極めて短い結婚生活であったが夫の遺志を抱き女子美を立ち上げるためにひたすら歩み続け、何事も究めずにはられない真摯な



横井玉子著「家庭料理法」(明治36年富山房発行)の中に収められていた横井先生の作品

姿勢で自らも育てながら生きたのである。明治18年(1885年)巖本善治^{よしはる}(明治女学校校長)の発行する女学雑誌に掲載された「女子は其れ美術の天使たるべし」「一国の美術は国家と大関係を有する」等の美術論を玉子は眩しい光と捉え、天よりの啓示と受けとめたのであろう。翌年より本多錦吉のもとで西洋画を学び始め、後に浅井忠より水彩、油絵を学んだ。明治21年(1888年)東京美術学校が開かれたが男子のみに限られ、以後60余年に渡ってその制度は続いた。明治初年より共学校で学んだ玉子にとってこの事実は堪え難い屈辱であり、以後明確なアイデンティティを持ち歩くことになったのである。同22年小楠20回忌の際、横井姓を貰って分家した玉子は、義理の叔母矢島楯子^{かじこ}(日本婦人矯風会初代会長)の提唱する「一夫一婦制、廃娼、禁酒禁煙」運動の片腕となり、「女性も議事を傍聴する権利を」に参加した。同26年には328名の先頭に立ち、「男性にこそ姦通罪を」と国会に請願するほど行動的であった。日本の女権を主張する平塚らいちょう等の青踏の旗上げに先立つこと18年、この強い積極性は借物ではない意識を証明している。勤務した女子学院等で出会った異国の若い女性宣教師たちから学ぶことが多かったであろう。明治32年(1899年)には黒田清輝の主宰する白馬会に入会し、いよいよ長年の夢実現の時が訪れようとしていた。

(元女子美術大学付属高等学校教諭 青木 純子)

横井玉子年譜

(明治36年1月横井玉子死後に発行された家庭料理法著書「富山房」に掲載された年譜より)

- 明治4年(1871) 熊本洋学校にて英語を学ぶ 教師ジェーンズ夫人より西洋料理と裁縫、高内宇吉に和裁、井上長次郎より日本料理を習得
- 同 5年(1872) 横井左平太と結婚 翌年左平太再渡米
- 同 8年(1875) 左平太結核の為帰国、死去(31才) 玉子上京し看病したのは20日間
- 同 12年(1879)~同 17年(1884) 玉子授乳 宣教師ワデル夫人より洋裁習得 小笠原式高等礼作法、琴の免許を取得
- 同 18年(1885) 築地 青山学院 女子学院教員
- 同 19年(1886) 東京府師範学校にて高等裁縫 高等礼式を受験 合格 本多錦吉より西洋画 後 浅井忠より水彩画 油絵を習う
- 同 21年(1888) 東京美術学校開校
- 同 22年(1889) (大日本帝国)憲法発布 横井小楠 20回忌 横井姓を貰い分家
- 同 32年(1899) 黒田清輝主宰の白馬会入会研究
- 同 33年(1900) 女子美術学校設立認可 10月30日
- 同 34年(1901) 4月8日開校 11月佐藤志津に譲る
- 同 36年(1903) 1月4日19時10分 順天堂医院にて 永眠享年50才

Topics ● ⑥ 安齋重男氏 特別講演会 報告 別科 現代造形専修 主催

4月22日に別科現代造形専修研究室の主催で写真家の安齋重男氏の特別講演会を開催しました。安齋氏は1967年には現代美術作家として、1969年には写真家としての活動をはじめられ、数多くの現代美術作家のポートレートやパフォーマンス、インスタレーション等の作品を撮影されています。特にイサムノグチを撮影したシリーズは有名ですが、講演会では1970年に東京都美術館で開催した「人間と物質」展の出品作家たちを撮った作品などもユーモラスなエピソードとともにスライドでたっぷり

紹介していただき、会場はしばしば笑い声に包まれました。学外からの参加者も多く、予定の時間を大幅に越えてお話しいただきました。



Richard Serra, 10th Tokyo Biennale, Tokyo Metropolitan Museum, May 1970

Series ● シリーズ 女子美探訪 ～お久しぶり!～

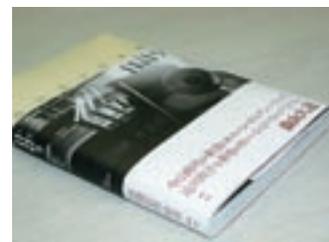
今号から、卒業生で写真家の迫川尚子さんに毎号、写真とエッセイを寄稿していただくことになりました。普段は新宿の街を被写体としている迫川さんのカメラはどんな女子美の一面を捉えるのでしょうか。

「女子美」。いい響きですね。女子が美しいんですから。私にとって、究極の言葉です。ただ、「美」に対する考え方は、微妙に変わってきました。年齢によるものもあるかも知れませんが、街のスナップ写真を撮りだしてから、変わらざるをえないところもありました。私はわりと、自分が美しいと思ったものにはとことんこだわるタイプです。写真を撮る時も、そうです。美的に納得がいくと言いますか、ぱちっと決まった切り口をやはり狙ってしまうんです。でも、それだけではへたしたら観光写真になりかねない。観光写真って、結局、ここはこうして見るべしという押しつけだと思うんです。それに、観光写真にきれいにおさまった街並みなんて、ちょっと面白くないじゃないですか。

女子美をテーマに写真を撮る。この連載のお話を頂いた時、正直、どうしたらいいか戸惑いました。とりあえずカメラぶら下げ、何(十)年ぶりに母校に出かけてみました。ニケ像は、思ったより小さく見えました。学生の皆さんは、若くて眩しいくらいでした。思い出の中にしかない場所も、実際行ってみると無数の情報で溢れていて、それが思い出



と交わったり裏切ったり素通りしたりして、久々にわくわくしました。どんな写真が生まれるか見当が付きませんが、これを機会にまたしばらく女子美に通わせて頂こうと思います。よろしくお願いします。



迫川尚子 (さこかわ なおこ) 【写真家】

鹿児島県種子島生まれ
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業
「BEER & CAFE · BERG」 副店長

昨年出版されて高い評価を博している写真集「日記計り」。帯には森山大道さんによる「寺山修司が新宿のネルソン・オルグレンならば迫川尚子は新宿のヴァージニア・ウルフである。」とのコメントが！

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。

《広報課》 TEL. 03-5340-4513

FAX. 03-5340-4523

[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8

企画・編集 企画部 広報課

監修 原田 松野

発行日 2005年9月20日